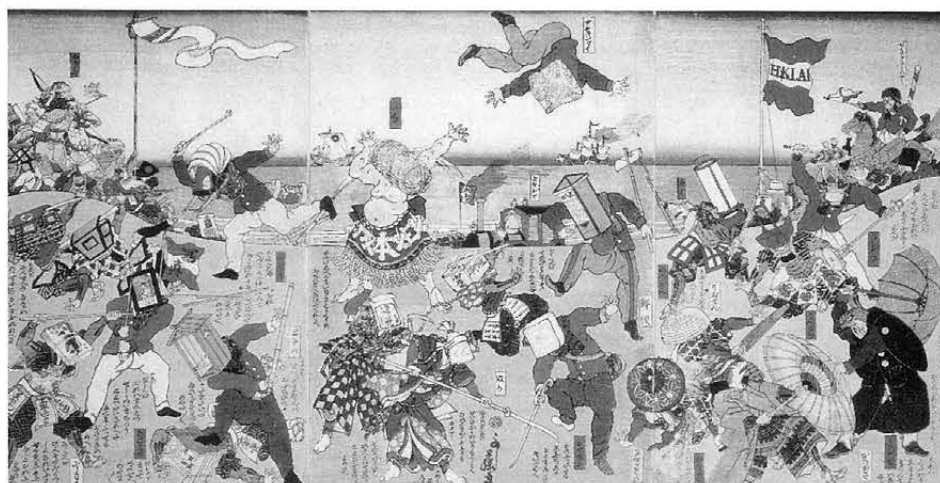


第2回 江東区教育委員会 合同企画展
深川江戸資料館

移りゆく江東と庶民のくらし

—江戸から東京へ—

昨年度より新たにスタートしました江東区教育委員会・深川江戸資料館との合同企画展を、今年度も1月15日より深川江戸資料館で開催します。今年度のテーマは庶民のくらしです。深川江戸資料館の常設展示室の想定年代である天保期から明治初年にいたる約50年をメインに、移り変わる世相と江東地域でくらしの庶民が時代にどう対応していったかを探ります。



芳藤画「開化旧弊興廃くらべ」(部分)

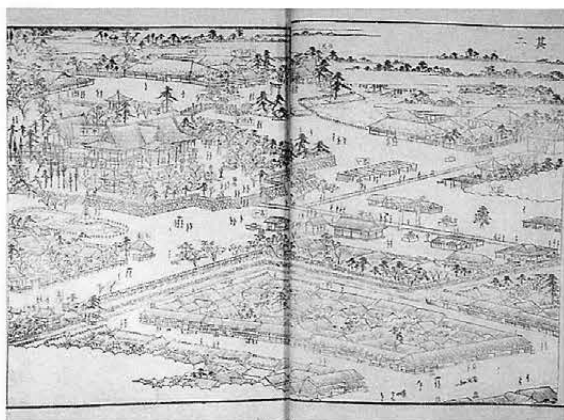
東京都江戸東京博物館／蔵

上の写真は、明治15年に板行された、芳藤画「開化旧弊興廃くらべ」です。この綿絵は、特に江東区域を描いたわけではありませんが、明治初期の文明開化による東京のモノの興廃がよくわかる資料といえます。

絵の構図は、右手が舶来品、左手が旧来からの物品などで、その興廃が両軍の戦いに擬せられています。

例えば、中央では「上白」(白米)が「ナンキンマイ」(南京米)を投げ飛ばしている一方で、「郵便」が「飛脚」を蹴飛ばしています。当時、すたれたモノ、はやったモノを探してみてください。

展示資料から



富岡八幡宮境内(『江戸名所図会』より)

このコーナーでは、江戸後期の庶民のくらしと文化をみていきます。衣食住、光熱水はどのようにまかなわれていたのでしょうか。また、どのような楽しみやレクリエーションがあったのでしょうか。富岡八幡宮などへの行楽を中心として、深川の文化が開花するのも江戸後期のことです。「人情本」とよばれる物語の中に深川の情景が描か

下町文化

NO.
208
2000.1.14

発行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課

■第2回江東区教育委員会・深川江戸資料館合同企画展

移りゆく江東と庶民のくらし
—江戸から東京へ—

江戸後期の庶民のくらし／幕末という時代／記録からさぐる江戸から明治／牧野家文書にみる明治初年のくらし／生活道具にみるくらしの移り変わり

- 公開講演会講演録
文化財保存のあり方
—オランダの文化財—

- 江東歴史紀行
★幕末期江東の桶職人
★深川とそば

1 江戸後期の庶民のくらし

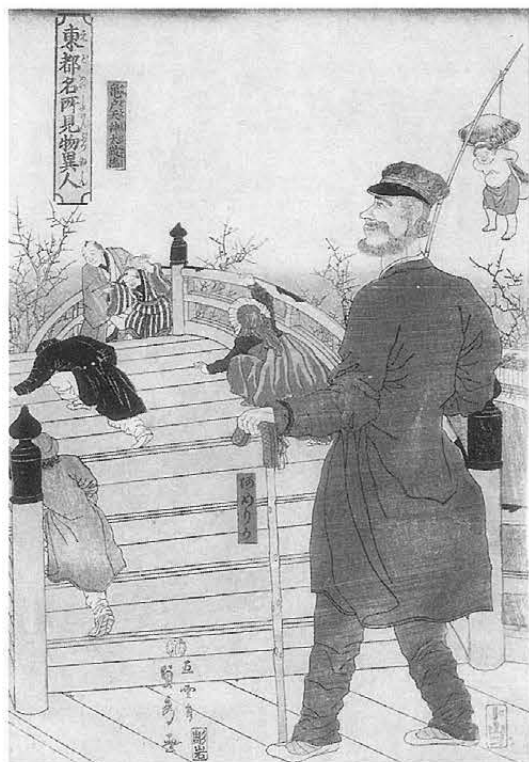
今回の企画展では、時には社会を厳しく見つめながら、時代と呼応して生きぬく人々のくらしを5つのコーナーに分けて展開していきます。ここで各コーナーの詳細についてお知らせします。

れ、「江戸名所図会」など名所めぐりのガイドブックにも大きくとりあげられ、江東の地は、江戸の観光スポットとして定着していきます。

さらに、次のコーナーへ向け、天保の改革を経て、維新へ向かう幕末の庶民生活を概観します。

2 幕末という時代

19世紀にはいると、農村の荒廃など江戸幕府におけるさまざまな内部矛盾が表れてくるようになりました。その一方で、日本近海には外国船が頻繁に出没するようになり、日本をとりまく国際環境も大きく変化していきます。とくに嘉永6年（1853）のペリー来航は、江戸幕府が崩壊する大きな契機となりました。



橋本貞秀画「東都名所見物人」 亀戸天神太鼓橋 蔵
東京都江戸東京博物館

また、慶応2年（1866）には、第2次長州征討を原因とする物価の高騰によって、江戸で打ち壊しや騒擾事件が起きます。こうした時代背景のもとで出

「鯨の詫証文」

江東区教育委員会／蔵



江戸幕府が崩れゆき、新しい世界のきざしを感じさせる時代——幕末という時代。この時期の江戸では、安政2年（1855）の江戸大地震の直後に出された「なまず絵」、文久2年（1862）に流行した「はしか絵」など、多くの風刺画が板行されます。これらの風刺画に表現された、庶民の社会に対する目を通して、幕末という動乱の時代の世相を探ります。



「鯨と職人たち」 東京都江戸東京博物館／蔵

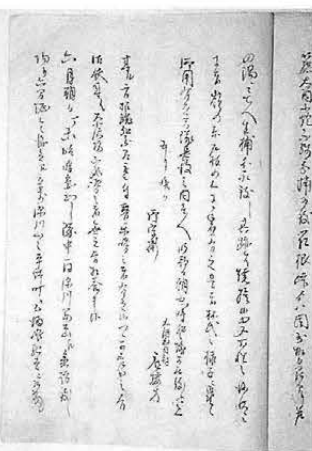
3 記録からさぐる 江戸から明治

慶応3年10月の大政奉還によって江戸幕府は幕を閉じました。そして新政府が成立。翌年戊辰戦争が起これ、東征軍が江戸へ乗り込んできます。この戊辰内乱期の深川の様子を蒼龍隊の「日誌」から見ていきます。蒼龍隊とは、富士講の御師によって結成された部隊で、江戸の治安維持にあたっていました。「日誌」から、蒼龍隊と深川の人々の結びつきを明らかにします。

戊辰戦争の戦火が東北方面へ移っていくと、新政府は7月に江戸を東京と



蒼龍隊士田辺右近の「日誌」(上)と隊士一同による富岡八幡宮参詣の記録(右)
富士吉田市 田辺四郎家文書



改め、東京府を設置します。東京府は旧町奉行所を引き継いだもので、町奉行所の旧与力・同心の多くが奉職していました。また、9月には明治と改元し、10月の天皇の東京行幸を経て、明治2年（1867）には実質的な東京遷都がなされます。戊辰戦争のなかで、江戸から明治へと移りゆく様子も解説します。

さらに、明治初年の江東地域の産物の特徴や、明治末までの光熱水についてもわかりやすく紹介します。

4 牧野家文書にみる

明治初年のくらし

牧野家文書は、亀戸の旧家牧野家に残る古文書で、区の指定文化財です。総点数にして322点を数えますが、ここでは明治5～6年の「日記」を中心として、明治初年に亀戸周辺に住んだ人々のくらしに迫ります。

明治といえば「文明開化」という言葉がすぐに思い浮かびます。庶民の生活にも徐々に西洋化の波が押し寄せてきますが、「日記」からは、時代の流れを受け入れつつも、日々のリズムを崩さずに生活する人々の姿を窺うことができます。

牧野家は、亀戸周辺に所有する土地

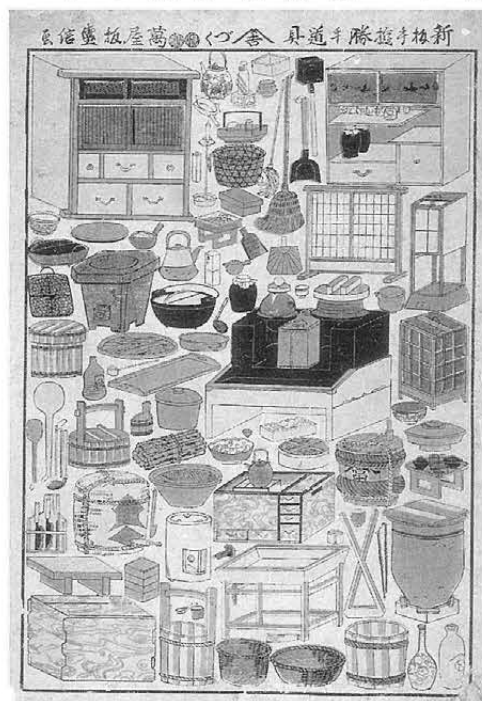


牧野家文書「日記」の表紙(右)と本文部分(左)



延一画「亀井戸臥龍梅」(部分) 江東区教育委員会/蔵

を小作地として貸し出す、いわゆる地主でしたが、当然自宅でも田畑を持ち、農業を営んでいます。展示では、こうした農作業や年中行事に関わることや、社寺への参詣や祭礼への参加に関する、食生活を窺わせる到来品などについてパネルや表で解説していきます。



「新板手遊勝手道具づく」
東京都江戸東京博物館/蔵

5 生活道具にみる

くらしの移り変わり

ここでは、時代とともに姿形を変えてきた生活道具を見ることで、くらしの移り変わりをたどっていきます。

江戸時代の生活道具はどのようなものだったのでしょうか。当時の絵からさまざまな道具を見ていきます。「おもちゃ絵」の一つである「道具尽絵」には、江戸時代末から明治にかけての世帯道具(勝手道具・座敷道具)がたくさん描かれています。提灯や行灯、長火鉢、箆、流し、カマドなどを見ることが

できます。また、江戸時代の百科辞典である「和漢三才図会」にも、数々の道具が取り上げられており、道具の歴史的变化を追うことができます。描かれた道具のいくつかは、実際に深川江

戸資料館の総合展示室内で見ることができます。

次に、時代は下って、姿形を変えながらもくらしを支えてきたなつかしい道具を寄贈された民俗資料のなかから衣食住を中心に展示します。民俗資料と総合展示室内の道具とを見くらべることで、くらしの移り変わりを実感できることでしょう。

会場 深川江戸資料館地階レクホール

江東区白河1-3-28

会期 1月15日(土)～23日(日)

時間 午前9時30分～午後5時

入場無料 但し、江戸資料館の常設展示室を見学する場合は、別途入

場料がかかります。

*

講演会 1月22日(土)

会場 深川江戸資料館2階小劇場

・午後1時より「江東ふるさと歴史研究」論文発表会

・午後2時30分より講演会

演題 「幕末江戸の世相」

講師 元駒澤大学教授 南 和男先生

定員 240人(先着順) 無料

申込 生涯学習課文化財係

☎ (3647) 9111

内線 336113

深川江戸資料館

☎ (3630) 8625

文化財保存のあり方

—オランダの文化財—

江東区文化財保護審議会委員 吉原健一郎先生

今日は私が行ってきましたオランダでの体験談をお話しながら、文化財の問題について考えていきたいと思います。

まず、オランダに行つて最初の印象は、江東区とオランダは非常に似ているということ。両者とも大きな川の下流にありまして、埋め立て地であります。また、いたるところに運河があり、水とともに人々が生活しているという点では全く江東区、特に深川の歴史とオランダの歴史は似ているのです。

ところが、まるつきり違うのはオランダでは古い町がそのまま保存されて人々が生活しているということです。もし、震災や戦災がなく、人々が文化的な意識に目覚めていて、建物は中だけに住み心地良くして保存していれば、深川一帯は大変な観光の町・文化の町になっていたのだろかなあと思います。



さて、オランダで見た文化財はどういうものであったかという感想を話してみたいと思います。文化財というのは人々が生活していくなかで生み出された文化的なもの、遺産です。こう考えてオランダに行きますと、オランダでは都市全体が文化財であると感じました。

フェルメールの「デルフトの眺望」という有名な絵があります。これはハーグという町にありまして見に行きました。この絵ではデルフトの町が象徴的に描かれてありまして、町が川を境に描かれ、町の門が手前に描いてあり、

奥の方に教会が見える。フェルメールは既に都市全体が文化財であるという意識をもってこの絵を描いたのだと思います。

ヨーロッパの都市はほとんど形が決まっております。真ん中に広場があって、そのまわりに教会・市庁舎がとりかこんでいるという形です。これは中世都市の面影をもっています。広場を中心に、心の拠り所としてそのまわりに住んでいる市民の共同体的な意識がよくわかります。「都市を作ったのは我々だ」という町の、大々の意識があるわけです。

ドルドレヒトという町に行きました。その博物館には、ひげを生やした人々が描かれた絵が沢山かかっていました。それらは市民・ギルド・家族の絵なのです。その時、同行したライデン大学の日本人留学生に「なぜ日本には市民がたくさん描かれた絵がないのですか？」と聞かれて、私は「なるほどそういう見方もあるのか」と思いました。たとえば、江戸に十組問屋という問屋の集団がありますが、それらの人々を描いた絵などないわけです。京都にもそういう組織はありますが、絵としては残っていない。それはなぜだろうかと考え、やはり都市の作られ方が違っているからではないかと思うので



ギルド集会所のレリーフ(デルフト・1770)

す。日本では都市は上から作られていく傾向があり、「支配する・支配される」という関係が中心だが、ヨーロッパの都市では「自分たちが都市を作ったのだ」という意識があり、そのために市民を描くことが一般化しているのではないかと思います。その市民を描いた有名な代表的画家がレンブラントです。

さて、私はライデンを見てまわりましたが、ちょうど9月11日・12日はライデンのモニュメントを公開する日で、分厚い案内書ももらいました。普段閉鎖しているモニュメントでもこの2日間には自由に見てもよいことになっています。

地図で古いライデンの姿を見てみま



運河上町の門(ライデン・1675)

すとぐるっと星型の運河に囲まれていることがわかります。これが都市を守るための仕組みになっているのです。ちょうど函館の五稜郭と同じようにどこからでも敵が見えるように星型になっているのです。また、この運河は都市を防御するだけでなく、物資を運ぶ役割もしています。

その星型の北西部分にライデンの町の門となっている建物がありました。この建物は文化財なのですが、レストランとして利用されていました。このように、古い記念物そのもので営業をするという文化財の活用の仕方があるのだと思いました。

また、オランダの各都市にはアンティークショップが多く、ライデンのアンティークショップにも行きました。アンティーク市場もさかんで、入札などにも一般市民が参加して生活に密

着しています。オランダには、こういう古いものに対する人々の親しみが「裾野」としてあって、そのもとに文化財があるのだと感じました。

私たちには文化財という特別なもので、展示会で並んで見るものだという意識がどこかにありますが、オランダでは違って、文化財がいたるところにあり、一般の人々の生活のなかに溶けこんでいるのです。

オランダではアンティーク市場・入札が「裾野」にあって、その中の価値あるものが文化財となっているのです。オランダでは町全体・家並み全体が

面として文化財となっています。そういうなかで文化財を見ると、また一味違った印象を抱きます。江東区でも面として文化財を整備してみたいと思います。

最後に、以上お話ししましたことを三つの結論としてまとめてみたいと思います。

まず一つは文化財の保存のあり方についてです。これは、文化財そのものだけでなく、そのまわりの環境も保存していきたいということです。環境と文化財をどうセットとしてみていくかということ。そのためには地域の人達の協力も必要です。たとえば、家を建て直す場合、どういう家がまわり



聖アンナの家(ライデン・1492)

の環境にふさわしいのかということ意識する必要がありますかと思いますが、ライデンの町では高さや屋根の色など、みんな同じような建物を建てています。

二つめは文化財の公開についてです。

文化財を保存するのは人々に見てもらうためです。大事だから指定してそのまま死蔵して、隠しておいても意味がないのです。そのためにはどのようにPRしていくかを考える必要があると思います。そのために場合によっては、文化財を観光化してもよいと思います。町の人が文化財を見て「いいなあ」と思うだけではなくて、外から人を呼んでPRする。こうすることが町の活性化にもつながると思います。

そして、三つめは、文化財とはどういう考え方から文化財なのかということ。やはり、文化財とは日々の生活の潤いになるもの、ゆとりをもたせてくれるものであります。保存があつて公開があるのは、私たちがそれを見ることが豊かになるという意味があるからです。江東区では無形文化財の皆さんの技術公開をやっています、古い町並みは深川江戸資料館に行けば見られます。町のなかにもミニユメントの説明をもっと増やして文化財に対する意識を高めていくことが私たちの生活自体を豊かにするのではないかと思います。

以上、三つのことをヨーロッパの都市めぐりを通して考えた次第です。ご静聴ありがとうございました。



騎士の館(現国会議事堂・ハーグ・13世紀)

*この記録は、昨年10月13日(水)に行われた講演要旨です。

幕末期江東の桶職人

現在、江東区では、多くの職人さんが無形文化財として登録・指定されています。仕事の種類も様々ですが、そのほとんどが江戸時代から続いていると言われています。

では、江戸時代の職人とはどのようなものだったのかというと、その実態についてはほとんど分かっていません。そこで、今回は旧幕府引継書「桶樽職役銭取立書留」(国会図書館蔵)という史料から桶職人を事例にあげ、幕末期の江東区域における職人の様子をみて

ゆきたいと思います。

江戸の桶樽職人の数は、嘉永4(1851)年8月の時点で27組・103人と記されています。しかし、どの組に何人いたのかなどの記述がないため、詳しくは分かりません。組名も27組が全て記されてはいませんが、江東区域では深川組、堅川組などがみられます。この頃から、職人数の増減を月ごとに町奉行所へ報告する事が義務づけられました。そのためこの「桶樽職役銭取立書留」からは、嘉永5年4月から安政4(1857)年11月までの桶職人の移転や廃業などの人数の増減が分かります。この約5年半の間に増加した職人の人数は76人、減少した人数は56人となっています。

ここで、嘉永5年4月の届出をみてみたいと思います。

北本所組

亀戸境町七兵衛店

定次郎方同居七兵衛、

此度深川六間堀町代地

庄八店江引移、七兵衛改

桶職人

与之吉



現在の桶職人

同組

深川元町代地喜右衛門店

市五郎、此度本所永隆寺

門前平兵衛店江引移、

市五郎改

同 彦太郎

右兩人当子四月転宅井改名

右之通御座候、依之此段申上候、以上

子五月

館 市右衛門

と、あります。ここには、北本所組の亀戸境町七兵衛店定次郎方の同居人である七兵衛が与之吉という名前に改名し、深川六間堀町代地の庄八店へ転宅した事や、同じく北本所組の深川元町代地喜右衛門店の市五郎も彦太郎と改名し、本所永隆寺門前平兵衛店へ転居した事がわかります。

この他にも、安政2年5月6月の届出では、深川富岡町勘右衛門店の仙吉が5月に深川組へ新規加入していたり、

深川下大島町彦七店の太郎兵衛と深川西平野町幸蔵店の富五郎の兩人が6月中に病死となったため、彼らが所属していた深川組から除かれています。江東区域の事例ではありませんが、子供が親の仕事を相続する際の届出や、国元へ帰郷する事が記された届出などもみられます。

これらの届出の中には、興味深い点もいくつかありました。まず、先程の与之吉という職人ですが、嘉永5年4月に転宅しています。しかし、安政2(1855)年3月の届出をみると、今度は柳島町八右衛門店へ移っている記述があり、約3年間で移動している事が分かります。次に安政2年1月の届出では、深川森下町新兵衛店の桶職人虎吉が樽屋組に新規加入しています。翌年の安政3年7月にはもう仕事をやめる事を届け出ており、この間約1年半という短い期間になります。このような届出から、幕末期の桶職人は移動が多く、流動的だったという事が考えられます。

今回は「桶樽職役銭取立書留」から、江戸時代の桶職人の様子についてご紹介しました。この他にも、江戸の職人について書かれた史料がみつかりましたら、またご紹介したいと思っています。

(文化財係主事 源田千尋)

桶職人の年次別増減

年次	増 加			減 少			
	加入	相続	小計	相止	病死	帰郷	小計
嘉永5	8		8	8	3	2	13
6	12	1	13	4	2		6
安政元	9	2	11	8	3		11
2	7	1	8		4	2	6
3	16		16	6	1		7
4	19	1	20	7	5	1	13
計	71	5	76	33	18	5	56

乾 宏巳『江戸の職人』(吉川弘文館、1996年)より転載

江東歴史紀行

深川とそば

江戸時代のそば

今日、私たちがおいしく食べているおそばですが、江戸時代でもそばは江戸の人々の大好物であったようです。

「江戸ノ蕎麦切ノ盛美ハ、諸国トモ及ビ難シ」（『守貞謄稿』巻之五）といわれたように、江戸でそばは諸国に抜きん出て食べられていました。

現在、私達が食べているようなそば（蕎麦切り）が江戸で食べられるようになったのは、江戸時代の初め頃といわれています。寛文4年（1664）には「けんどんうどんそば切と云物出来、下々買喰ふ、中々侍衆の見る事もなし」（『むかしむかし物語』『続日本随筆大成』別巻1）といわれ、そばは主に庶民の食べ物でした。

「けんどん」とは「慳貪」のことで一杯ずつ盛り切りにし、替わりを勧めない食べ方がけちで無愛想な様からこう呼ばれたともいわれています。

しかし、「近年歴々の衆も喰ひ、結構なる座敷へ上るとて、大名けんどん杯と云て拵へ出る」（同右）というように次第に上流階層の人たちまでも食べる

ようになったようです。

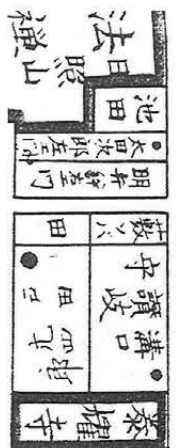
深川の名物そば屋

さて、そばは江戸で人気の食べ物でしたので、江戸時代後期には各町に一軒はそば屋があったといわれています（『守貞謄稿』巻之五）。深川にも洲崎などの行楽地や寺町があったため、有名なそば屋がいくつかありました。深川の名物そば屋をみてみましょう。

江戸有数の行楽地であった洲崎には伊勢屋というそば屋がありました。この店のそばは「小さき筥（はちまき）に入て出す故、筥そばと云。色白くいきぎよし」

（『再板増補江都総鹿子名所大全』附巻）といわれ、「ざるそば」と呼ばれ、名物になっていました。この店は享保20年（1735）から確認できます（『拾遺続江戸砂子』巻一）。しかし、

天明7年（1787）版の山東京伝作『古契三娼』では「今はすぎきのざるそばも名ばかりさ」といわれており、



この頃には衰えてしまっていたようです。さらに、寛政3年（1791）8月6日の高潮のときには「深川筥そばの家、去六日津波にて五人流死、一人八流去てしれす」（柳沢信鴻『松鶴日記』寛政3年8月11日）という被害にあい、絶えてしまいました。

この伊勢屋断絶に前後して名物そばとなったのが熊井町（現永代1丁目）の翁そばです。翁そばは寛政期（1789～1800）以降盛んになったように、川柳に多く詠まれています。

「翁そば元祖芭蕉としつたふり」（『俳風柳多留』41編）は翁そばの「翁」と深川に縁の深い松尾芭蕉翁をかけた川柳です。また、翁そばは麺が白いのが特徴であったようで「白髭のよふによく打翁そば」（同79編）といった川柳もあります。しかし、幕末には「翁ソバナドハ漸ク名ヲ存スノミ」（『守貞謄稿』後集巻之二）といわれ、衰退してしまっただうです。

また、現在の白河4-3付近には藪そばという名店がありました。このそば屋は信州出身の徳蔵・お鶴という夫婦が開き、店の傍らに藪があったことから藪そばと名付けられたといえます



鳥居清長画 洲崎弁天境内のざるそば<右の建物>（『深川文化史の研究』下より）

（長谷川伸『材料ぶくろ』）。藪そばは安政2年（1855）の尾張屋板『本所深川絵図』などに武家屋敷などとともに記載され、大変有名でした。藪そばは明治期にも営業を続け、夏には浴室で入浴もでき、釣りのできる池もあって評判だったようです（『東京百事便』）。

以上をみると、深川の名物そば屋にも栄枯盛衰があったことがよくわかります。

深川のそばと信仰

ここまで深川の名物そば屋をいくつかみてきました。しかし、深川の人々とそばとのかわりには「食」だけにとどまりません。そばは深川の人々の信仰にも大きくかわっていました。

常盤1-1-1にある正木稲荷には「盛りそばを経木に入れて、神殿に置いてお参りをして、帰ってきて乾いてしまったらおできが治る」という「そばだち」の風習があります（『平成6・7年度江東区民俗調査報告書』）。

この腫物平癒の評判は江戸時代からあったようです。文政10年（1827）の滝沢馬琴の日記に「お百出宅、腫物平癒の願がけの為、大橋辺へ罷越ス、則、正木稲荷へ参詣」（『馬琴日記』文政10年6月16日）と、馬琴の妻お百が腫物平癒の願掛けに来たという記録があります。

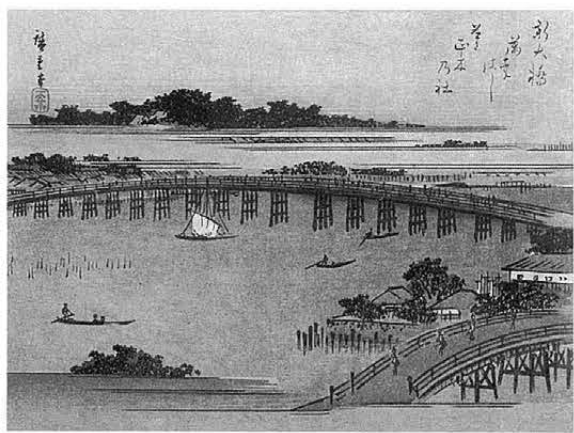
地域の伝承によれば、戦国時代、上総国（千葉県）勝浦城の正木大膳というそば好きの武将が徳川家康に反して流罪になったそうです。季節は夏で、護送途中の大膳は全身におできができてしまいました。そして、大膳は現在の正木稲荷の付近に来到し、最期にそばを所望して食べ、切腹して果てました。その時彼は「腫れ物ができた人はそばを断ち、願をかければ治してやる。」と言葉を残

したそうです。これが正木稲荷の「そばだち」の始まりといえます（常盤 塙政治郎さん談）。

病気の際にそばを断ったり、そばを神様に供える風習は他にもみられることらしく、江東地域でも砂村稲荷神社（南砂3-2-2）では、疝氣（下腹部の痛み）で悩む人がそばを断つか、願解きの際にそばやそば粉を供える風習があったそうです（新島繁『蕎麦史考』）。砂村稲荷神社は移転して現在は習志野市にあります。跡地には新しく疝氣稲荷が建てられています。

さらに、深川には今では忘れられてしまった、そばにまつわる江戸時代の流行神信仰がありました。

宝暦・明和の頃（1751-1777



歌川広重画「新大橋・万年橋・正木の社（右下）」（『深川文化史の研究』下より）

1）、現在の冬木6付近、富岡八幡の裏にあつた大久保豊後守という旗本の屋敷に「蕎麦切り稲荷」と呼ばれる稲荷社がありました。『武江年表』明和元年6月の項に「大久保豊州侯下やしき稲荷社参詣群衆す。詣る人、蕎麦切を備ふ。八月下旬にいたり、詣人止む」と、人々が久保家屋敷へそば切りをもつて群集し、しばらくするとブームが去ってしまった様子が記されています。前掲の『古契三娼』では「わっちらが子どもの時分は、えびすのみやのこつちらにそばきり稲荷といふがはやりやした」とあり、蕎麦切り稲荷はまさしく流行神であつたといえます。

江戸時代の名園を紹介した『江戸名園記』にも、この蕎麦切り稲荷が紹介されています。それによると、誰となく「此神蕎麦切を好ませ給ふ」といわれるようになり、日夜そば切りが献じられたために、そば切りが「地上に山を成したる」ほどになったそうです。そして、大久保氏がこれを嫌って人々の参詣を禁じたところ、垣越しにそばが投げ込まれるようになったといいます。

江戸庶民のブームに浮かされた熱気にはさすがの旗本武士も圧倒されたようです。江戸の人々のそば好きが引き起こした出来事といえましょうか。

（文化財専門員 早田旅人）

計報

江東区登録無形文化財（工芸技術・漆工）保持者久我喜八郎氏（77歳、大島2-34-13）は、去る4月29日に逝去されました。また同無形文化財（工芸技術・木工）保持者中山軍治氏（70歳、扇橋2-12-8）は、去る6月1日に逝去されました。慎んで追悼の意を表します。

編集後記

1-3面で紹介しましたとおり、合同企画展も第2回を迎えます。「移りゆく江東と庶民のくらしー江戸から東京へ」をテーマに、幕末維新の激動の時代を、庶民の眼をとおして再現します。是非ご覧になってください。

余談になりますが、担当者に騙されて私も2つのコーナーを分担させられてしまいました。解説の執筆に追われる日々で、どうなることやら……。私が一番嫌いな言葉は「締切り」です。

ところで、仕事柄、全国各地の学芸員と話をする機会が多いのですが、展示の話題になると、いつも肩身の狭い思いをしています。合同企画展を見てこの意味がわかった方は、学芸員としての資質のある人です。